

平成27年4月入学 広島大学大学院文学研究科
博士課程後期（一般・社会人特別） 入学試験
答案作成上の注意

専門分野	倫理学
------	-----

1. 試験に関する注意

- ① 試験開始後、直ちに下記の問題紙枚数等を確認してください。

問題紙枚数	3枚
解答用紙	3枚
下書用紙	1枚

- ② 受験番号等は、すべての解答用紙の所定の欄に記入してください。

2. 解答記入に関する注意

解答はすべて解答用紙に記入してください。

平成27年4月入学 広島大学大学院文学研究科
博士課程後期(一般・社会人特別) 入学試験問題

専門分野

倫理学

(3枚中の1枚目)

I (英語問題) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

All great moralists, from Buddha and the Stoics down to recent times, treated the good as something to be, if possible, enjoyed by all men equally. They did not think of themselves as princes or Jews or Greeks; they thought of themselves merely as human beings. Their ethic had always a twofold source: on the one hand, they valued certain elements in their own lives; on the other hand, sympathy made them desire for others what they desired for themselves. Sympathy is the universalizing force in ethics; I mean sympathy as an emotion, not as a theoretical principle. Sympathy is in some degree instinctive: a child may be made unhappy by another child's cry. But limitations of sympathy are also natural. The cat has no sympathy for the mouse; the Romans had no sympathy for any animals except elephants; the Nazis have none for Jews, and Stalin had none for kulaks*. Where there is limitation of sympathy there is a corresponding limitation in the conception of the good: the good becomes something to be enjoyed only by the magnanimous man, or only by the superman, or the Aryan, or the proletarian, or the Christadelphian**. All these are cat-and-mouse ethics.

(Bertrand Russell, *Power and Rules*, 1987, pp. 82-83)

(注) *kulak: 富農

**Christadelphian: キリストアデルフィアン派信者の

問1 下線部はどのようなことを述べたものか、説明せよ。

問2 sympathyを道徳原理として採用する場合に、その有効性と限界について、本文の論点も踏まえながら論じよ。

(解答用紙に答えること)

平成27年4月入学 広島大学大学院文学研究科
博士課程後期(一般・社会人特別) 入学試験問題

専門分野

倫理学

(3枚中の2枚目)

Ⅱ(ドイツ語問題) 次の文章は J. G. Walch, *Philosophisches Lexicon* (1726, S. 462-463) にある "Critic"の説明の一部である。読んで後の問に答えよ。

Von den neuern Scribenten (Skribenten) ist dieses Wort in weitem und engem Verstande gebraucht worden. Im weitem Sinn begreift (begreift) sie so wohl die gründliche Erkenntnis (Erkenntnis) einer Sprache, als auch die Wissenschaft (Wissenschaft), die verderbten Stellen eines Scribenten zu verbessern. Der Herr Clericus erfordert in seiner arte critica von einem Critico auch die Geschicklichkeit, theils (teils) eine Methode die Sprach-Wissenschaften zu erlernen, fürzuschreiben (vorzuschreiben); theils eine dunckele (dunkle) Rede deutlich zu machen.

In engem und eigentlichen Verstand versteht (versteht) man durch die Critic die Wissenschaft, die verderbten Stellen der Scribenten zu verbessern, und die eingeschalteten Glossemata in den Büchern auszumerzen. Die Mittel, deren sich die Critici bey (bei) solchen Verrichtungen bedienen müssen, sind theils die geschriebenen Bücher, theils das eigne Ingenium. Es ereignen sich gewisse Fälle, da man bey der critischen Verbesserung des Beystandes (Beistandes) der geschriebenen Bücher nicht entrathen (entrat) kann (kann), wenn z. E. im Text etwas fehlet (fehlt), gewisse nomina propria verderbet sind, ein nicht so künftliches (kenntliches) Glossema sich eingeschlichen hat. Man muß sich aber dieser Bücher recht bedienen, nemlich (nämlich) mit Verstand, daß man das wahrscheinliche von dem unwahrscheinlichen, oder bloß möglichem unterscheide. Hieraus fließet (fließt) die Regel: man solle sich für der abergläubischen Hochachtung der geschriebenen Bücher hüten... (中略)...
Das andere critische Hülffs (Hilfs)-Mittel ist das Ingenium, oder diejenige Fähigkeit des Verstandes, allerhand mögliche Verknüpfungen unserer Ideen zu versuchen, welche Verknüpfungen man in gemeinem Leben Einfälle nennet (nennt). Die critischen Einfälle des Ingenii müssen dem Judicio übergeben, und von demselben nach den Regeln der Wahrscheinlichkeit geprüft (geprüft) werden. Hieraus fließet die Regel: Man soll sich vor der critischen Verwegenheit hüten.

注 文中の()内の文字は現代表記。

Clericus (Johannes Clericus) はスイスの神学者 Jean Le Clerc (1657-1736) のラテン語名。

Scribent 物書き、作家 Glossema, Glossemata 付注 nomina propria 固有名詞

ausmerzen 根絶する eingeschlichen (einschleichen) 紛れ込む

Judicio (Judicium) 判断、判決

問1 著者は Critic に二つの意味があると書いている。その点を明確にして、著者の見解を要約せよ。

問2 下線部を和訳せよ。

問3 本文で示されているように、18世紀前半の Critic の用法は、後にカントが用いる Critic の用法とは異なっている。その違いを説明せよ。

(解答用紙に答えること)

平成27年4月入学 広島大学大学院文学研究科
博士課程後期(一般・社会人特別) 入学試験問題

専門分野

倫理学

(3枚中の3枚目)

Ⅲ(日本語問題) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「允に其の中を執れ。」という命題によって、堯が舜に、舜が禹に位を禪ずるにあたっての為政の最高規範が表現されたものとするならば、支那においてすでに古来中道が政治の原理たる意義を有していたものといえるであろう。(略)

周知のごとくその命題は『尚書』にやや詳しく、「①人心惟れ危く、道心惟れ微なり。惟れ精惟れ一、允に厥の中を執れ。」とある。朱子は(略)この「人心」、「道心」、「精一」の「三言」を論明し、「精なれば則ち夫の二者の間を察して雑えざるなり。一なれば則ち其の本心の正を守って離れざるなり。斯に従事して少しの間断無く、必ず道心をして常に一身の主と為し、人心をして毎に命を聴かしむれば則ち危き者安く、微なる者著われ、動静云為自ら過不及の差無し。」といているが、この場合もし「②道心」と「人心」との二元論的観点のもとに「精一」が説かれるならば、「動静云為おのずから過不及の差無し。」という次元のみからは、「中」の中たるゆえんは把握され難いように思われる。(略)

エドゥアルト・フォン・ハルトマンなどが、(略)「中庸の原理はまさにギリシアのものではなくして、支那のものである。」となして、礼を主徳とする支那社会における精神の無いそうして個性を欠ぐ水平的ともいべき性格に相応するもののごとく見るのは、他方に澁刺たる自由な民族生活における個性発揮を考えるからであって、しかる場合には中庸の原理も個性に応じて万人万様に成立すべきものとなる関係上、道德の客観的規準を提供するわけにはゆかないことになるというのである。

「中」が「過不及」の中をもって見られるからには、そうした「中」はいわば「人心」の世界にとどまって平面化し、もって外面的に解せられた礼の形式文化と相通じて、そこに独立的な個性の道德活動と対照して考えられるのは無理もないわけである。(略)しかしながらこうした「人心」の「中」の次元に限定されず、すでに「道心」の境界を予想して「惟れ精惟れ一」の観点に立つからには、「過不及」の「中」をして「中」たらしめるゆえんの地盤にまで立ち入っているものと考えられる。(略)そこまで見なければ^③エドゥアルト・フォン・ハルトマンなどの批評も表面にとどまるものといわなければならない。(略)

「惟れ精惟れ一、允に厥の中を執れ。」といわれるゆえんは、まさに「中」の実相の絶対性をも物語っているものと考えられる。

(出典:山本幹夫著『国家倫理の構造』目黒書店、1941年、99-103頁)

※旧仮名遣いは現代仮名遣いに直し、また必要に応じてふりがなを加えた。

問1 下線①の意味を朱子の説明に添って述べよ。

問2 下線②の次元にとどまる場合、本論での「中」はいかなる理解となると筆者は述べているか。本文の言葉を用いて記せ。

問3 下線③のハルトマンは自らの立場を、無意識的な表象(宇宙意志としての物自体の表象)としての持続性と、制限された意識内容としての断続性(感覚によって制約された主観的な表象の側面)とをあわせもつものとし、「超越論的実在論」と称した。このハルトマンの中庸理解に対する著者の見解をふまえ、あなた自身の意見を述べよ。

(解答用紙に答えること)